



記入日	2019 年 12 月 28 日 (2019 年度のチャレンジプラン)
実践団体名	目黒星美学園中学高等学校
実践番号 (団体内・年度内の通し番号)	31 (防災講演会①)
タイトル	新聞記者になって防災講演会を聴こう —生徒を主体的態度で講演会に参加させるヒント (災害対策課講演会「熊本地震支援と世田谷区の防災」)
実践担当者のお名前	京 (社会科)
実践にかかった金額	1000 円未満 (プリント印刷)
実践の準備にかかった時間	数時間
実践活動を実施した日時	2019 年 5 月 14 日 10 時 40 分～11 時 30 分
実践の所要時間	50 分
実践の運営側で動いた人の人数	1 人
防災教育の対象者の属性	中学生
防災教育の対象者の人数	約 70 名
実践を行った都道府県と市区町村	東京都世田谷区
実践を行った具体的な場所	目黒星美学園中学高等学校 4 階多目的室
★実践に必要なだった特定の能力を持った人・物品・ツール・知識等	被災地支援の経験を持つ行政職員・プリント・同じイベント (防災や被災地に関するもの) を取り上げた 2 本の新聞記事・新聞の書き方についての資料

達成目標	【目的・目標】 - 被災地支援活動を経験した行政職員の講演を聞くことで、実際の被災直後の状況を知り、イメージを持つ。行政職員の仕事についても理解を深める。 - 防災講演会に参加する生徒が、より主体性を持って話を聴く態度を持てるように、工夫を行う。今年度は、「新聞記者となって記事を書く」というミッションを設定することで、講演会の学びをより良い形でアウトプットすることを目指した。 【背景・経緯】 - 防災講演会は、防災教育においてよく行われる手法であるが、「生徒が受け身で聞いてしまう」様子がしばしば見られることが課題であ
------	--



	る。そこで、例年、行っている防災講演会の実施にあたり、今年度は新たにミッションを設定することで、課題解決を図った。 ・本プランは、今年度で3回目の実践。授業担当者が、2017年3月に地域の避難所運営本部の集まりに参加した際に、職員から熊本地震支援報告があった。その報告を聴き、ぜひ生徒にも聴かせたいと直接お願いしたことがきっかけで、授業にご協力いただいている。	
どの力を身につけようとしたか？	知識・技能	かなり
	思考力・判断力・表現力	大いに
	学びに向かう力・人間性	かなり
実践内容・方法	（１）事前準備・打ち合わせ ①(公財)東京都公園協会砧公園サービスセンター（4/23） ②世田谷区役所危機管理室災害対策課（4/25） ・毎年、事前に、1時間程度の打ち合わせを行っている。 ・例年、生徒が受け身で聞くだけになることを防ぐために、生徒への問いかけを多めに入れることをお願いしている。 ・今年度は新たに、公民的分野の「地方自治」の学習およびキャリア教育の一環として、「行政の仕事のやりがいや魅力」についてのお話も加えることを依頼した。 （２）+a 新聞記事を書こう ①新聞の書き方講座…新聞の基本的な書き方について学習した。 ※授業づくりの参考として、以下の動画を参考にした。 模擬授業ムービー「プロの記者が教える記事の書き方・見出しのつけ方 —NIE 入門講座 模擬出前授業」 https://nie.jp/movie/movie01.html ②新聞の読み比べ 同じ講演会について書かれた2本の記事を読み比べることで、講演会取材した記事の書き方を学ぶ。 ③防災 de 一石二鳥♪ 「記事の読み比べ」には、東日本大震災の語り部をしている若者によるトークイベントについての記事を取り上げた。事例として使用する記事をできるだけ防災関連のものから選ぶようにしている。	





新聞記事に対して、「事実を書き出したもの」「事務的な硬い内容」というイメージを持つ生徒もいる。このような作業を通じて、新聞記事が単に「事実を書き出したもの」ではなく、記者によって同じ話題でも違った記事になることを体感でき、メディアリテラシーの理解が深まった。

(3) 当日の流れ

30分 講演会

メモを取りながら熱心に聞く様子が見られた。



熊本地震の避難所の状況と 世田谷区の災害対策について



令和元年5月14日(火)
世田谷区危機管理室災害対策課

- 1 熊本地震の被災状況、避難所の様子
- 2 熊本地震で浮かびあがった課題
- 3 世田谷区の主な災害対策
- 4 世田谷区の災害対策での課題
- 5 目黒星美学園の生徒の皆さんに

◀ 講演
スライド

育みたい
防災あたり前
感覚

工夫

育みたい「防災あたり前感覚」

☐「熊本地震の支援中に、一番嬉しかったのは、『ありがとう』と言われたことだった」という話題を入れることを毎年リクエストしている。災害対策について行政に対する期待が大きい分、実際の災害発生時は、住民からの不満が出やすい状況になることが予想される。だからこそ、平時からのこういった学びは重要であると考えている。災害に直面した時はなかなか難しさもあるかと思うが、「少しでも良い環境を作る配慮をしよう」という意識は、普段から育てておきたい。

5分 質疑応答

「質問がある人」と言っても、自主的にすぐ質問が出てくることは少ない。そこで、以下の2つの工夫をすることで、質問タイムの活性化を図っている。

- ①「ざわざわタイム」を取り、周囲の人と話し合っ、必ず3つ以上質問を考える。



	② 講師の方にクラスと番号（出席番号）をランダムに挙げてもらい、該当する生徒に質問をしてもらう。 ↓ 当たった生徒からは「災害時のペット問題」についての質問が出た。多くの生徒も関心を持っている様子だった。 ⇒教員は、「質問したからこそ、分かったことですね！」と質問したことを褒めて、質問することへのポジティブな環境作りに努める。 5分 砧公園職員からのコメント 砧公園サービスセンター職員もご参加くださり、5分程度お話いただいた。防災公園である砧公園の役割についてのお話に加えて、「生徒のアイデアを楽しみにしている」ということも一言加えてくださったことで、生徒のモチベーションアップにも繋がった。
得られた成果	事後課題として、講演会についての新聞記事を作成した。 ▼生徒の書いた新聞記事
	日頃から備えるべき！ 災害に対する防災意識 二〇一六年四月に起きた熊本地震の避難所を訪れた、世田谷区危機管理室災害対策課の職員によるお話が、五月十四日に行われた。熊本地震は、熊本地方で最大震度七を観測した、ここ最近で最も大規模な地震の一つであり、熊本地方をはじめとする様々な地域で被害をもたらした。災害対策課職員は、そんな熊本地震の、避難所での様子や、今後実施するべき災害対策の課題等を語った。 大規模な被害をもたらした熊本地震を通じて、たくさん課題が浮かび上がった。災害が起きた場合、我々は、自助、共助、公助を心にとめて行動しなければならない。いざという時のために、日頃から準備し、意識することが重要になってくる。また、一人一人が周りの人の身の安全まで守れるように防災意識を高める必要がある。 熊本地震で避難所に関して沢山の課題が浮かび上がった。 例として、避難所内で発生するゴミに関する問題。避難所は、沢山の人が集まるため大量の生ゴミが発生した。衛生面において食中毒や感染病にかかったりすると、最悪命を落とす危険性も出てくる。なるべく生ゴミを出さないよう、自分の必要な分だけの食料を準備し、自分で処理することが重要になってくる。 また、避難所内で女性の視点での悩みとして着替えをする場所がないことや、トイレの少数や環境汚染による不便さなどが問題に挙げられている。これらの問題に対する解決案で、女性を優先にした部屋を作ったり、ボランティア活動として、トイレの衛生管理などが必要になってくる。 世田谷区で、もし災害が起きた場合、誰かに助けってもらえる側ではなく、自ら行動できる主体性のある人に一人ひとりになることで、より多くの人々が救われるに違いない。我々は、常に防災に対する意識をもつて生活するべきであると、災害対策課職員は話した。



世田谷区

未来の被災者を

私が救う

世田谷区危機管理室災害対策課に勤める職員が十四日、目黒星美学園中学校の生徒に向けて「熊本地震の避難所の状況と世田谷区の災害対策」について講演した。災害対策課職員は熊本地震で浮かび上がった課題を踏まえて、自身の感じた思いをあかした。

目黒星美学園中学校と世田谷区のコラボ授業が実現した。生徒たちが講演の内容をメモしながら真剣に聞くようすが見られ、積極的に質問をした生徒もいた。

災害対策課職員は三年前に発生した熊本地震に職員として赴き、地域の住民のために熱心に活動した。避難所を訪れた際に、さまざまな課題が浮かび上がっていた。なかでも、被災した「女性」に對

しての配慮が足りなかったことについて考え、世田谷区では対策を進めている。

目黒星美学園中学校では、世田谷区と協定を交わし乳幼児や妊産婦及びその家族に対して避難所の受け入れを行うのとなを平成二十六年に決定した。女子中学生ならではの視点を取り入れ、学校一体となつて過ごしやすい避難所とはなにかを考え、活動している。

三十年以内に首都直下地震が起こる確率が七十パーセントもある現在、それは今日起こるかもしれない。未来の被災者を救うための活動は、大きなことでなければいけないわけではない。災害について考えるだけでも、もしかすると自分自身を救うことになるかもしれない。一人一人が自助・共助・公助の意識をもって生活するだけでも、起こる変化は計り知れない。

・教員が期待する以上に、生徒は良い記事に仕上げていた。「感想文」の場合は、比較的似た内容の感想が集まることが多いが、「新聞記事」は、生徒がどのような話題に注目し、どのような学びを得たのかがはっきり分かるものになった。

どのくらい身につきましたか？

知識・技能

かなり

思考力・判断力・表現力

大いに

学びに向かう力・人間性

大いに

課題・苦労・工夫

工夫

・講演会は、生徒のプレゼンテーションを聞いてくださる方との「顔合わせ」の機会にもなる。プレゼンテーションの相手の顔が見えるとイメージが湧き、その後のワークショップへの生徒の参加姿勢がより良いものとなる。

★運営・実践の担当者が協力を求めた人や団体（関係者）について

関係者の名前・団体名

世田谷区危機管理室災害対策課 職員

関係者の説明

2016年4月に熊本地震が発生した際に、世田谷区から最初の応援として現地に派遣された経験を持つ職員の方。

関係者の連絡先

TEL 03-5432-1111（代表）



記入日	2019 年 1 月 2 日 (2019 年度のチャレンジプラン)
実践団体名	目黒星美学園中学高等学校
実践番号 (団体内・年度内の通し番号)	32 (防災講演会②)
タイトル	新聞記者と考える「私が伝える意味」 (第 16 回被災地ボランティア研修)
実践担当者のお名前	京 (研修企画担当)
実践にかかった金額	非公開 (個別にお問い合わせください)
実践の準備にかかった時間	数時間
実践活動を実施した日時	2019 年 7 月 22 日 19 時 30 分～20 時 30 分
実践の所要時間	1 時間
実践の運営側で動いた人の人数	6 人: 講師 (新聞記者) (1)・引率教員(5)
防災教育の対象者の属性	高校生
防災教育の対象者の人数	38 人
実践を行った都道府県と市区町村	宮城県東松島市
実践を行った具体的な場所	KIBOTCHA (キボツチャ) 研修室
★実践に必要なだった特定の能力を持った人・物品・ツール・知識等	被災地での取材経験を持つ新聞記者, その記者が書いた新聞記事

達成目標	【目的・目標】 ・東日本大震災発生直後から、現地での取材活動を重ねる新聞記者の方との対話を通じて、「伝える意味」を考え、生徒なりの答えを模索する機会とする。 ・「話を聴く」活動であっても、受け身ではなく、主体的に学びを深めるために、積極的に質問する姿勢を持つ。 ・新聞を読む習慣のない生徒も多い中で、新聞記者の方のお話を伺うことで、新聞そのものや記者の仕事、また新聞の果たす役割に関心を持つ機会とする。(キャリア教育) 【背景・経緯】 ・これまで 16 回、宮城県での被災地ボランティア研修に引率する中で、自分に何ができるのか悩む生徒の心の揺れ動きを見てきた。同
------	---



	時に、教員にとっても、「東京の中高生を連れてくる意味」を考え続ける期間でもあった。 ・ 何度か研修を実施する中で、多くの生徒が共通で見出すキーワードが「伝える」であることに気づいた。 ◎生徒と「伝えること」 ①今の自分にできる一番のことは「伝えること」と気づく ②自分が見聞きしたことを「伝えたい」という強い思いを持つ ③実際には周囲になかなか「伝わらない」というもどかしさを感じる ↓ この点に気づいてから、被災地研修の企画にあたって、被災経験を持つ方の体験談だけではなく、日々「伝える」ことに取り組むマスコミの方からお話を聞くプログラムを積極的に取り入れるようになった。	
どの力を身につけようとしたか？	知識・技能	かなり
	思考力・判断力・表現力	かなり
	学びに向かう力・人間性	かなり
実践内容・方法	震災後から石巻市に取材に入り、宮城の若者を温かい視点で書いた記事や、ご遺族を丁寧に取材して寄り添った記事を書き続けている新聞記者の方をお招きし、お話を伺った。 研修の流れ：研修内容については、事前にメールや直接の打ち合わせを通じて、相談した。 ①事前研修 お話を聴く記者の方が出演している動画を視聴する。 →あらかじめ「質問」を考える。 まいもく (72)「東日本大震災 8 年 語り部の思い」 https://video.mainichi.jp/detail/video/6013829379001 ②研修当日 「悲しみを伝える意味」と「『私』が伝える意味」の 2 つのテーマで、生徒と対話しながら、お話をくださった。また、ご自身が書かれた記事の紹介と共に、震災取材のきっかけや取材する時に大切にしていること、被災地取材の難しさといったことも、お話をくださった。	



▶研修の様子

参加した生徒たちは、真剣に話を聞いて、深く考えている様子だった。



③生徒活動の取材

荒浜中学校との交流会を取材して、記事にしてくださった。

毎日新聞宮城版 2019/7/27 掲載



亙理の中学生 東京の高校生と防災学習

避難所運営で意見を交換『自分から動かないと』

得られた成果

- ・研修 1 日目の夜に本研修を実施したことで、その後のプログラムにおいて、生徒たちに積極的に相手の話に耳を傾けて、質問しようとする姿勢が見られた。
- ・「外から入って当事者の方からお話を聞いて発信する」という新聞記者という立場が、生徒が活動の中で自ら自覚していく「自分自身の役割」と合致する部分があり、生徒たちは共感しながら話を聴いていた。
- ・講師の問いに対する参加者の答えが、人によって違っていったことから、多様な考えを知る機会となった。

▼生徒の感想文より

何度かこの研修に参加して感じたのは、私たちに話をしてくださる方達は、二度とこんな思いをしたくない、他の人がこんな思いをして欲しくない、ということを伝えたいと思っている、ということです。このことを広く伝えるためにも、話を聞いた人達はその人なりに、ご遺族や被災者の声を伝えることが重要だと思います。伝えることについて、百武さんや他の生徒の意見も聞くことができて、自分とは違う意見などもあって勉強になりました。

そして、宮城県の魅力も研修を通してたくさん知ることができたのでまた宮城県に行きたいなと思いました。



百武さんの問いかけの中で、「悲しみを伝える意味とは」というものがありました。お話を聞いた直後は、本当に悲しみを伝えていて、意味はあるのかと答えを出せずにいました。しかし翌日、お子さんを亡くされたご遺族の案内で、実際に自分の足で歩きながら、ご遺族の方のお話を聞きました。そして高台から何もかも消えてしまった街の姿を見て、本当に見ないと分からないものつてあるんだ、と感じました。もし、自分があまりよく被災地の悲しみを知らずにこの景色を見ていたら、また違った、もっと薄い思いしかなかったのではと思いました。そして、悲しみを伝える意味は、伝えているからもっと知りたいと思えるし、伝え続けるから何回聞いてもその悲しみの深さを知り続けることができ、被災者の方が恐れている風化を防ぐことがあると、私は考えました。

私はあまり記者という仕事に関心がなく、どのような仕事か知りませんでしたが、百武さんのお話を聞いて少し分かりました。百武さんのお話の中に「悲しみを伝える意味」というテーマがありました。なぜ伝えるのか。その答えは教訓として残すためだと思います。その教訓を次につなげれば、更に新しい良い世界をつくることも可能になると思いました。また、もう一つのテーマとして「私が伝える意味」というものがありました。これについては、私が伝えることで、普段、新聞を目にしない若者世代に伝えられたり、身近な人から聞く話の方が、相手に伝わりやすくなるかもしれません。

被災者ではない私ができること、それは身近な人に伝えることです。





	今回、百武さんから聞いた話を、私は早速家族に話しました。そこで生まれた色々な話は、伝えなかったら生まれなかった会話であり、共有できなかったものなので、誰かに伝えることの大切さを改めて実感できました。そして前よりもメディアに興味を持つことができました。自分から話しかけにいくのに少し勇気がいりましたが、進路の話やメディアについて直接お話が聞けて、また一步、私の中でコミュニケーションするという目標もできたと思います。 	
どのくらい身につきましたか？	知識・技能	かなり
	思考力・判断力・表現力	大いに
	学びに向かう力・人間性	大いに
課題・苦労・工夫 苦労 工夫 課題	・生徒が研修中に抱いた思いは、日常に戻ると薄れていくものである。それはある意味、仕方のないことなので、教員側は、生徒の伝えたいという思いを形にする機会を作ったり、何かの折に思い出す機会を作ったりする。 ・一方で、教員が期待していた以上に、生徒の中に学んだことや考えたことが残っているものなので、引き続き、生徒の考えを深める研修を企画していきたい。 ・確かに得たこと・感じたことが色々あっても、なかなかうまく表現できない様子も見られる。そういった生徒の表現力を高める工夫は、今後の課題である。	

★運営・実践の担当者が協力を求めた人や団体（関係者）について	
関係者の名前・団体名	毎日新聞社 百武信幸記者
関係者の説明	東日本大震災発生直後から、石巻市に取材に入った。2015 年から宮城県石巻通信部。宮城県の若者を温かい視点で捉えた毎日新聞の記事を見つけて、学校から新聞社に連絡したことがきっかけとなり、2015 年から本研修に度々、ご協力いただいている。
関係者の連絡先	



記入日	2019 年 1 月 10 日 (2019 年度のチャレンジプラン)
実践団体名	目黒星美学園中学高等学校
実践番号 (団体内・年度内の通し番号)	33 (防災講演会③)
タイトル	防災の専門家をお招きして, 防災について聴こう! 知ろう! 考えよう! (中 1 防災の専門家による講演会)
実践担当者のお名前	大柳 (中 1 主任)・京 (社会科)
実践にかかった金額	1000 円未満 (プリント印刷)
実践の準備にかかった時間	数時間
実践活動を実施した日時	2019 年 10 月 16 日 15 時 05 分～15 時 45 分
実践の所要時間	40 分
実践の運営側で動いた人の人数	9 人: 学年及び社会科教員 8 人, 防災科学研究員 1 人
防災教育の対象者の属性	中学生
防災教育の対象者の人数	約 70 人
実践を行った都道府県と市区町村	東京都世田谷区
実践を行った具体的な場所	目黒星美学園中学高等学校 マリアホール
★実践に必要なだった特定の能力を持った人・物品・ツール・知識等	防災科研のパンフレット, 講演会資料

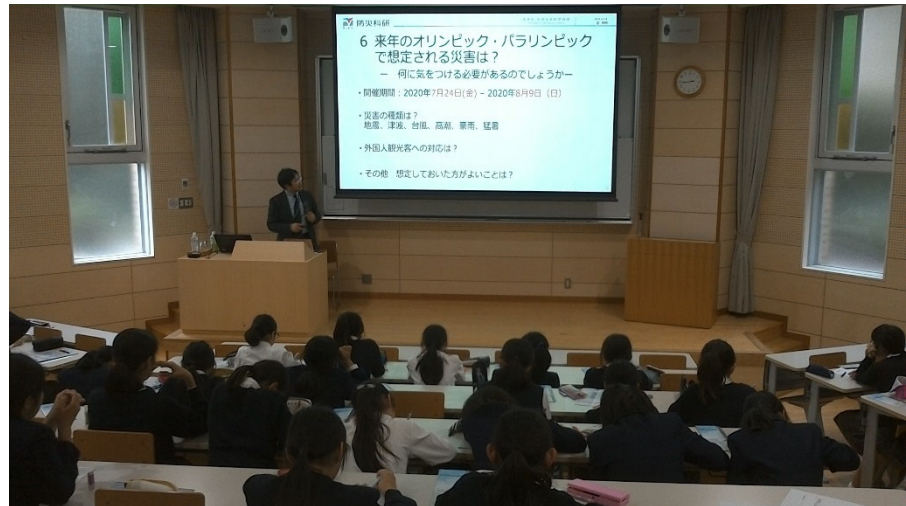
達成目標	【目的・目標】 ・ 防災学習を始めたばかりの生徒が, 1 か月半後に研究者の前で防災について, 自分たちのアイディア・提案をプレゼンテーションする防災社会科見学【実践番号 30】の一環として, 本プランを実施した。 ・ 講演会を取り組みの中間に挟むことで, 前半の講義型の授業から, 後半のワークショップ型の授業に移る中間点で, 本プランを実施することで, 前半は防災に対して受け身の生徒が, 後半は, 主体性を持って話し合う転換点とする。(次ページの図参照) 【背景・経緯】 中 1 の生徒は, 防災教育の初期段階 (9 月下旬) においては, 防災そのものに対しても, 防災学習に対してもネガティブな印象かつ受け身意識を持っている場合が多い。11 月中旬に実施する防災社会科見学に
------	--



	向けて、短期間で視点の転換を図り、ポジティブかつ主体的な態度を持たせるために、インパクトある工夫を必要とする。 →実践番号【00】参照 ▼本プランの取り組み全体における位置づけ 授業 • 中学に入って、最初の防災教育の授業を受ける • 防災に対して、受け身・ネガティブな姿勢を持つ 講演会 • 研究員と対面することで社会科見学に行く自覚を持つ • 社会の課題を知り、一人一人が考える必要性に気づく ワーク ショップ • 答えのない問いに、ミッションとして取り組む • 一人一人が主体性を持って、話し合う	
どの力を身につけよう としましたか？	知識・技能	大いに
	思考力・判断力・表現力	少し
	学びに向かう力・人間性	かなり
実践内容・方法	準備・打ち合わせ ①社会科見学を含めた打ち合わせ @防災科学技術研究所東京会議室(7/30) ②メールでの打ち合わせ（随時） ③当日打ち合わせ（授業前） ↓ 特別授業当日 「私たちの住む社会と防災を考える ～これまでの災害とこれからの防災～」 【講演会の内容】 1. 今年の災害から分かったこと 2. 災害が起こる度に言われることは？ 3. 「さいがい」と「ぼうさい」の違いは？	



4. 避難をしようとしなない人を説得するには？
5. この 5 年の災害の傾向は？
6. 来年のオリンピック・パラリンピックで想定される災害は？
7. 未来の防災を考えてみよう
8. 防災だけでない防災 備えて楽しむ



得られた成果

チャレンジ！生徒を活動の主役にするターニングポイントにする。

- ・講演会は 40 分と限られた時間ではあったが、内容が充実していて、学ぶことが多くあった。
- ・社会科見学で訪問する防災科研の研究員の方から、直接お話を伺ったことで、その後の取り組みに対する生徒たちのモチベーションが飛躍的に上がった。
- ・台風 15 号・19 号の被害状況の調査を踏まえた最新のお話を伺うことができた。被災地域の写真を見て、状況を知ることができた。
- ・三浦先生から、実際の防災の現場で課題となっている事例を生徒への問い（クイズ）の形で、提示していただいた。このことにより、生徒が、答えのない問いに対して、解決策を考えるきっかけを得ることができた。
- ・台風 15 号の被災地域の様子など最新の情報を知ることができた。
- ・日本だけではなく、地球温暖化を含め、地球レベルのお話があり、視野を広げることができた。
- ・「備えて楽しむ」をテーマに、防災キャンプやキャラクターを使った



	啓発活動等，防災科研のユニークな取り組みを知り，その後のワークショップのヒントになった。	
どのくらい身につきましたか？	知識・技能	大いに
	思考力・判断力・表現力	かなり
	学びに向かう力・人間性	大いに
課題・苦労・工夫	・工夫としては，学校外の協力者に，本校の防災教育の方針（＝生徒自身の学びのために，「教えよう」ではなく，「生徒のアイディアを聞きたい」という姿勢を大人が持つこと）へのご理解とご協力をお願いしている。 ・今回，講演会の位置づけをワークショップに向けて，生徒が主体的参加者になるターニングポイントとし，三浦先生のご協力の下，十分に狙いが達成できた。 ・一方で，教育視点から見ると，大人の「子どもたちに教えてあげよう」という意識が強い故に，生徒の防災に対する姿勢を受け身にしてしまう防災講演会や研修会も，これまでしばしば目にしてきた。教員は防災については，詳しくないとしても，教育と受け持っている生徒の性質については詳しいはずである。防災講演会を実施する際に，教育面からのお願いや打ち合わせを，思い切ってすることは大事ではないかと考える。	

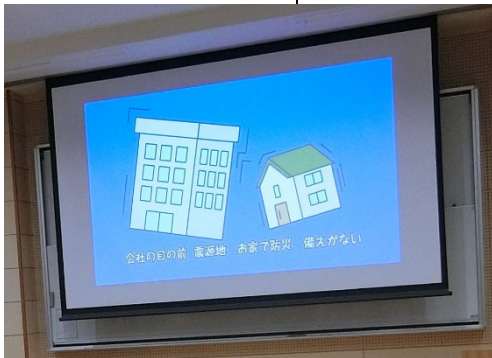
★運営・実践の担当者が協力を求めた人や団体（関係者）について	
関係者の名前・団体名	国立研究開発法人 防災科学技術研究所（NIED） 防災情報研究部門 主幹研究員 三浦 伸也先生
関係者の説明	防災情報研究部門主幹研究員であり，防災教育チャレンジプラン実行委員の先生。今年度，本校のアドバイザーとして，プラン実施のためのご助言やご協力，また防災教育に有用な様々な情報提供をしてくださった。



記入日	2019 年 1 月 7 日 (2019 年度のチャレンジプラン)
実践団体名	目黒星美学園中学高等学校
実践番号 (団体内・年度内の通し番号)	34 (防災講演会④)
タイトル	(中 1 防災社会科見学 事前学習)
実践担当者のお名前	大柳 (中 1 主任)・京 (社会科)
実践にかかった金額	非公開 (個別にお問い合わせください)
実践の準備にかかった時間	数時間
実践活動を実施した日時	2019 年 11 月 9 日 11 時 00 分～11 時 30 分
実践の所要時間	30 分
実践の運営側で動いた人の人数	10 人 : 外部講師(2)・教員(8)
防災教育の対象者の属性	中学生
防災教育の対象者の人数	約 70 人 (中学 1 年生)
実践を行った都道府県と市区町村	東京都世田谷区
実践を行った具体的な場所	目黒星美学園中学高等学校 マリアホール
★実践に必要だった特定の能力を持った人・物品・ツール・知識等	防災に取り組む企業 (特に生徒に身近な業務を担っていたり, ユニークな取り組みが見られる企業)

達成目標	【目的・目標】 防災社会科見学【実践番号 30】の事前学習一環として, 実施した。防災に工夫したり, 楽しく取り組んだりすることで, 社会に防災を浸透させる試みをしている企業の方のお話を伺うことで, 生徒の視野を広げ, 生徒の持つ防災のイメージをネガティブから, ポジティブへと転換を図る。防災に様々な形で関わっている人・企業の存在を知ることによって, 生徒の社会的な視点を増やす。 【背景・経緯】 10 月にぼうさいこくたい 2019 に参加したことがきっかけで, 緊急地震速報のアプリ等の開発を行う「アールシーソリューション株式会社」の企業活動を知った。「ゆれくるコールのうた」を web 上で見つけ, ユニークな視点で防災に取り組む姿勢に共感した。丁度, 中 1 の社会科見学の事前学習とキャリア教育を兼ねて, お招きする講師を検討していたこともあり, 講演を依頼した。
------	--



どの力を身につけようとしたか？	知識・技能	かなり
	思考力・判断力・表現力	少し
	学びに向かう力・人間性	かなり
実践内容・方法	事前打ち合わせ ・メールで打ち合わせをして，講演内容を決めていった。 ↓ 講演会テーマ：「ゆれくるコール」と防災・減災ソリューションの取組 ・「ゆれくるコールのうた」の動画 ・「あめふるコール」普及に向けた工夫 ・緊急地震速報「ゆれくるコール」の普及の経緯 ・会社の技術が社会の中で役立っている事例 ・防災マンガを掲載する『ちゃぐりん』の紹介 ・生徒へのメッセージ ↓ ・質問タイム ・生徒から『携帯トイレ』のプレゼント	
	 ◀ 「ゆれくるコールのうた」から講演会スタート ユニークなラップ調の歌に，生徒たちは楽しそうに聞き入っていた。歌やマンガを使って，防災に楽しく取り組む思いや工夫についてお話しくださった。 ⇒ 《学びの効果》 実際の社会の最前線で，思いを持って防災に取り組む方との出会いを通じて，「防災に取り組むことへの前向きな印象づけ」ができたと思う。	
	 ◀ 「あめふるコール」の技術と普及のための工夫 アプリの技術と仕組みに加えて，多くの人に使うための工夫やコツについてお話しくださった。 ⇒ 《学びの効果》 役立つアプリ開発だけではなく，普及するための工夫も必要である点は，生徒たちが取り組んだ「防災イメージアップ大作戦」に共通するところがあり，興味深そうに聞いていた。	



◀「ゆれくるコール」の説明と、普及の経緯

東日本大震災のあとに、役立つアプリとして、口コミで急速に広まった経緯をお話くださった。減災という言葉がまだまだ一般的ではなかったころから、開発に乗り出していたお話は、「社会の課題を見つけて解決策を考える力」が求められる現在の教育とも結びつくお話だった。

⇒《**学びの効果**》いち早く社会の必要性を見つけて行動することの大切さを学ぶと同時に、社会の変化の中で思わぬ形で発展・普及することがあることを学んだ。生徒は、防災社会科見学に向けて、「防災をどのように広めていくか」について考えるワークショップを経験していたので、その経験に繋がるお話だった。

◀生徒へのメッセージ

最後のまとめに、生徒たちが普段からできることのヒントをくださった。災害時に声かけできる関係をつくるために、普段のあいさつを大事にすることなど、身近で実行できることを挙げてくださったことで、生徒からは「やってみようと思った」といった感想が上がった。



◀生徒からのプレゼント

生徒が、その日作成した携帯トイレを記念にお渡しした。「直接お渡しして喜んでいただく」という場面を作ることによって、生徒たち自身の中で、携帯トイレの活動に対するイメージアップに繋がる効果がある。

得られた成果

明るく楽しい雰囲気の中で、講演会が行われ、生徒も教員も学ぶことの多い講演会となった。

◎生徒が自らの取り組みを再評価するきっかけに

講演会は、生徒に自らの取り組み（ミッション）の意義を理解させる効果があった。つまり、生徒は自分たちが考えてきた「どうすれば防災のイメージアップを図れるか」という課題（ミッション）に対して、企業活動を通じて同じ課題に取り組んでいる方の講演を直接聴く、という貴重な経験を通じて、自らの取り組みにも社会的意義があると意識できた。



	◎ 生徒の思考が深まる 防災を広めるにあたって成功事例ばかりでなく、苦労していることや工夫して課題を克服したといったお話もしてくださり、生徒は考えたり、試行錯誤したりするプロセスの重要性についても、学ぶことができた。また、「企業活動を通じて、社会に貢献する」という公民的視点を得ることもできた。 【実施報告】 ① 目黒星美学園中学高等学校 HP (2019/11/27) http://www.meguroseibi.ed.jp/tabid/72/Default.aspx?itemid=2111&dispmid=390 ② (株) アールシーソリューション facebook (2019/11/11) https://ja-jp.facebook.com/RCSolutionCo	
どのくらい身につきましたか？	知識・技能	かなり
	思考力・判断力・表現力	大いに
	学びに向かう力・人間性	大いに
課題・苦労・工夫 工夫	◎ 講演時間を 30 分に設定 他の行事の後であったこともあり、生徒の集中力を考慮して、「30分」という時間設定にした。講演会にしては短い印象かもしれないが、長い時間をとって、生徒の興味が薄れるよりも、30分で集中して濃いお話を聴くのも効果的であると感じた。ただし、講演者の理解と協力が必要になる。	

★運営・実践の担当者が協力を求めた人や団体（関係者）について	
関係者の名前・団体名	アールシーソリューション株式会社 代表取締役社長 栗山 章 氏
関係者の説明	「防災・減災ソリューションで人と社会の安心・安全に貢献する。」を経営理念とする会社。「減災」という言葉が一般的ではなかった頃から、開発のキーワードに取り上げて、IT を活用して様々なサービスをリリースしてきた。
関係者の連絡先	HP: https://www.rcsc.co.jp/